

## 岩手県立高田病院の医療支援

派遣先：全国医学部長病院長会議 医療支援チーム（岩手県高田市 県立高田病院）

派遣期間：平成24年7月9日（月）～ 7月13日（金）

派遣人員：整形外科 医員 中島 亮

### 被災地陸前高田への医療支援の経験

2011年3月11日、自然の猛威に対して我々は無力であることを痛感させられた。マグニチュード9.0という想定外の大地震・大津波は東北地方・関東地方太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらし、1年と4ヶ月経過した現在でもなおその爪痕は残っている。今回私は2012年7月10～12日の3日間にわたり、岩手県陸前高田市県立高田病院に医療支援というかたちで参加させていただいた。思えばこの1年間4ヶ月ほとんど被害のなかった滋賀県で漫然と過ごしてきた。震災はまさに我々日本全体の問題であるのに、実際にはTVや新聞などで知る程度で本当に自分の目で見ることなくここまでできてしまった。何かできれば…と思うと同時にその手段もわからず、日々の忙しさを言い訳にどこか他人事であった自分を否定できない。今回はそんな私にとっては救いとなる機会でもあった。

県立高田病院は岩手県陸前高田市にあり、空港のある花巻からはおよそ1時間と少し車を走らせて到着する。私が宿泊したのは陸前高田から少し離れた民宿で、高橋旅館といった。旅館は、建設業関係と思われる客で思いのほか賑わっていた。復興のため遠方から来ているのであろう。旅館では朝夕食がついているが、その人たちのニーズにあわせてだろうか、かなり量が多い。トイレ・風呂は共同ではあるが全くもって支障のないものであった。

岩手の朝は早かった。初日は6時に起床し、7時には高田病院内科医師である一人の先生が迎えにきて下さった。この先生は津波が陸前高田を飲み込んだ当時、県立高田病院で被災され、その屋上に避難し命をつないだ一人である。被災地を巡り、実際に被災された先生からの説明は非常にリアルなものであった。1年4ヶ月が経過した街は、おそらくだいぶ整理されたのだろう、何も残っていないような状況で、所々に瓦礫が積み上げられているような状況であった。しかしながら市役所や体育館、高田病院などの大きな建物はまだ手が付けられていない状況で、当時の被害の凄まじさがうかがわれた。被災された人の気持ちを考えるとカ

メラを手にとることがためらわれたが、それを察してか「(写真)とっても構わないよ。」といわれた。被災者の中には我々が被災地を好奇心の目で見たり、話したりすることを快く思わない方々もいるに違いない。所々につまれた瓦礫も被災者にとってはただの瓦礫ではないことに気がついた。

我々の医療支援の内容はというと所謂整形外科の一般外来を行うことであった。簡単にいうと高齢者の皆さんの腰・膝の注射や薬の処方などが主な業務内容になる。現在陸前高田に整形外科医師は一人もいない状態で、医療支援の派遣医師によって治療が行われている状況である。流石に患者さんの数は多く、つい診察が足早になってしまいがちであるが、自分は一体なんのために来たのかと自問しながら出来るだけ患者さんたちの訴えに耳を傾けたいと思った。通常患者さんには病院を選ぶ権利がある。しかし陸前高田に住んでいらっしゃる患者さんたちには唯一の病院であり、翌週にはいなくなってしまう医師に診てもらいより他ない。

患者さんをはじめ、看護師や事務員スタッフの皆さんももちろん多くが被災者である。以外なほどに皆さんが明るく前向きであることに驚いた。当時のことは皆話したくないものかとも思ったが、割とあっけらかんと話したりもする。そうかと思えば、その方の家族も被災し亡くなられたという。もちろん1年4ヶ月の月日が解決させたところもあるかもしれない。しかし前を向いていかななくてはならないという現実がある。我々には計り知れない苦しみ、思いがあり、その上で現実を生きているのだと感じた。

被災地に赴き、被災者皆さんの話を聞き、その空気にふれることができた。実際に足を運ばないと理解できない独特の現実があると思う。医療支援の業務を終了し、帰途についた。別れ際に「これからも頑張ってください」が普通だろうか、以前ならそういった言葉が出そうなものだ。私はなんだか違和感を感じ、「これからも一緒に頑張りましょう」が最も適当であろうと思った。



